
やっちまった!!

萌須田 萌葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっちまった！！

【Nコード】

N6578A

【作者名】

萌須田 萌葱

【あらすじ】

極々普通の高校生の渚、姉の仕事の用事で地元に戻ってきた彼が入った共学はなんと去年まで女子校だ！？

第一話〜お約束〜（前書き）

初投稿なのですよ！

思いつきり緊張ですねw

今作のはかなり個人的趣味要素が強いかもなので

ご承知ください^ ^；

でわお楽しみくださいw

第一話　お約束

第一話　衝突

どうも、今作の一応主人公核の渚です、

名前はあれですが男です、

全く作者も何考えてんですかね、男が主人格とは……

とりあえず僕の容姿は

身長170、体重58、文武同道、才色兼備だそうです。

あくまで姉の談です。

いま僕は姉の仕事の都合で昔住んでいた町に戻ってまいりました。

さてある程度の紹介も済みましたし話の本腰に行きましょう。

「さて、今日から学校か」

そんな事を言つて家を出る僕、今日から此方の学校に転校です、大丈夫、作者の大好きな

女子高に間違つて編入なんてことはありません、

しっかり確認しました、この町唯一の学校ですけど

共学です、100回近く確認しました、

作者の思い通りにはいきませんよ。

そもそも女子校なんて通えません、なぜなら…

そんな事を思つて走っていると、行き成り曲がり角から人が

無論、避けれません。

「ぬああ!!」

「ひゃあ!？」

はい、ドシーン、全く作者めなんてお約束なんだ、

どうせこのまま

「だいじょうですが、お嬢さん？」

「あつ有難う御座います、」

「ハンカチどうぞ、」

「有難う御座います、あの洗って返したいので住所と電話番号（以下略）

なんて展開にはならんです、なぜなら

「あ、あの？大丈夫ですか？」

よって来る少女、歳は同じくらいでしょうか？

肩くらいまである、薄い茶色の髪、柔らかな表情で言い寄ってきてます、

「あ、いや、全然大丈夫だから」

声が裏返ります、これが僕の最近の悩みの種、

年頃の男の子（っても高校二年生）としてはあるまじき病気（？）

女性恐怖症、です。

兎に角そそくさとその場から逃げ出した僕でした、

僕は逃げるのに必死で落とした物に気付きませんでした。

「あれ、行っちゃった」

そして彼女は視線を下にやる、

そこにあつたのは1つの生徒手帳、それを手に取り

「……渚、ふふっ女の子みたい」

そんな笑みを浮かべる少女、そして少女も時間に少し遅れていることに気付き走り出す。

第一話〜お約束〜（後書き）

第一話、お楽しみいただけたでしょうか？

お楽しみいただけたら幸いですw

これはそこそこ続く予定で御座いますのでよかったです
お付き合いをw

読み終わった後で誤字、脱字などありましたら

ビシビシ指摘してください。

でわでわ

題2話〜なんてこった〜（前書き）

どうも、題2話のお届けですw
つても連続投稿ですがねwww
今回も渚君がとんでもない目に！？
でわお楽しみ下さいw

題2話くなんてこった

僕は走っていた、なんか余計なことを考えていたせいでかなり時間をくったのだ

転校初日から遅刻は避けたい、

全力疾走のかいあってかそれなりに余裕を持って登校できた、そして当りを見回す、

「ん？なんかやけに女子が多い気が……」

いやいやそんなはず無いたまたまたまたま、

ここは共学なんだから、うんそうだ

そんな事を思つて職員室へ向かう

「失礼しまーす」

そして言われていた名前の先生を探し出して話をすすめる

「しかし君も大変だね、男の子一人で」

一瞬耳を疑った、男の子一人？

「えっでも此処は共学じゃ!？」

「あーそれはね、実は今の校長は今年から入ってきてね、それでここを女子校から共学にするってことになって」

なんてことでしょう、作者にまんまとやられました、

そうこの高校はいまだ女子校否秘密の花園として君臨しているのです!!

そんな中にむさい男が入っていいものでしょうか？

いやいや、受け入れてもらえるはずがありません。

ああ、僕は一体どうしたらいいのでしょうか。

そんな思い足取りのまま教室へ、

確かに、女子だらけの中に男一人と言うのもそうですが
なにより僕は女性恐怖症なのです!!

女の子だれけなんて無理です!!しなじゃいますよ!!

そんな心境です教室前、先生の声が聞こえる
「あー皆、今日は転校生がくる、さっ入ってくれ」

ガララッと扉が開く音、そして教室に入った瞬間

「きゃああああー!」

と言う女子の声どうやら（姉談の）才色兼備などが功をそうしたのかそんなに嫌悪否これは歓迎されてるのだろうか？

この調子だと先のことが分かる。

気分が悪い、今は放課なのだが案の定今は女子の質問攻めにあっていた、

こんなに周囲をかこまれたら気分が悪くなるのも止むを得ない。

僕は逃げるようにして教室を出た、保健室にでも行こう、すこし寝てれば気分もよくなるはずだ

そんな事を思って歩いていると後から

「あっあの!」

何処かで聞いた声、しかもとても最近、僕は後ろに振り返った、そしてそこに居たのは。

今朝の女の子だったどうしたのかと聞くと彼女はポケットから1つの手帳を取り出した、真新しい生徒手帳

「あの、これ朝落としましたよ」

受け取って表をみると確かにそこには名前が書かれている。

僕の名前だどうやら今朝落としたらしい、

「あっ有難う、」

又声が少し裏返っている、

彼女は不思議そうに見てくる、はやく行かねばと走りだそうとしたとき、

「渚……君って言うんですね、初めまして」

「あっ初めまして」

ついつい答えてしまう、

「私は空っていいいます、ヨロシクね」

空ははにかんだ笑顔を見せます、その顔に一瞬
ドキッ

少し鼓動が高鳴るのが分かりました、
って僕は何、ドキドキしてるんだ、相手は女の子なんだぞ！？
しつかりしろ！！渚！！

そういつて自分の気を引き締めなおして

「あっあの、僕少し気分悪くてさ、保健室行くところだから、じゃ
ね」

そういつてそそくさ保健室へ行こうとしたら、

「あっじゃあ私も一緒に行くよ、先生に報告する人が必要でしょう
？」

確かにその通り、僕は仕方なく彼女と一緒にいきます。

大勢の女子に囲まれるよりまだましです、

それに報告さえ済めば行ってくれますし。

そして保健室にはいつて僕は先生に状態を説明して

ベットで寝かしてもらえることに、これで安息できます、

しかし保険の先生がいきなり。

「あー、空、私は今から少しここを出るからそれまで看病頼んだな
となんと言つことでしょう！！

女の子と保健室で二人つきりです！！よくもやってくれましたね作
者！！

ああ何だか本当に具合が悪くなってきました、

めまいがしてきます、そんな時、

ピトッ

つと額につめたい感触、彼女が僕の額に手をやってるのです、
一瞬血の気が引きましたがそれと同時に鼓動が早くなります、

ああ！！全然鼓動が収まりません、何だか顔も熱くなってきました
し！！

そんな事を思っていると彼女は

「すっすごい熱、大変！！私先生に知らせてくる！！」

そういつて走っていく彼女、
なんだ熱ですか、そうですがそうですか、
どおりで心臓がバクバクするのは顔が厚くなるわけです!!
安心、安心、

時は夕方、僕は38度もの熱をだして早退しましたが家にかえって
少ししたらたちまち回復、
やはり女性恐怖症からきたもののようです。
そんなこんなですっかり家でのんびりしていると
ピンポン

つとチャイムの音、玄関に出ると

「あつ渚君、もう体調いいの?」

玄関に居たのは空ちゃん、どうやらプリントを持ってきたくれたば
いす、

彼女はいつもの笑顔でたっています、なんだか返しづらいです、

「あの、良かったらお茶でも飲む?」

ああ!!僕は何を言ってるんでしょう!!今日知り合ったばかりの
人を!!それも女の子を自宅に誘うなんて!!

勘違いされてもおかしくはありません!!

「えっ!?!いいの?じゃあお言葉に甘えて」

彼女はなんとえへへってな表情で我が家に上がってまいりました
!!

あーもう、もう少し警戒心を持ったらどうなんでしょうか!!
とりあえず彼女をリビング謙応接間へといざないます
そしてお茶を持ってきてしばしの雑談となりました
そして今日もらったプリントを取り出して

「あのね、渚君、明日からうちの学校全寮制にするんだって!!」

「えっ…………えええ!!」

なんということでしょう、全寮制なんていったら周りみんな女の子ですよ!!

まったく作者め!!何処までお約束なんだ!!

しかもすでに部屋振りまで決められてるではないですか!!

僕と同室なのは…………っ!!

「渚君一緒に部屋だねー、よろしく!!」

ああ何だか意識が遠のいていきます、

また顔が熱くなってきて……

ドサッ

「えっ!あれ!?!なっ渚君!?!」

その後僕は姉さんが帰ってくるまで気絶してずっと空ちゃんが看病してくれていたそうです。

それにしても明日から寮生活です、

僕はこのままどうなってしまうのでしょうか?

題2話ゝなんてこつたゝ（後書き）

題2話、お楽しみいただけたでしょうか？

お楽しみいただけたのなら幸いです。

また誤字、脱字等御座いましたら

ビシビシ指摘してください。

でわでわ

第三話くサキュバスく（前書き）

連続投稿第3回！！

はい、すいません。

実はこれ少しかけ書き溜めがあつたのでそれを
一気にUPしてるんですよね。

でわでわお楽しみ下さい。

第三話　サキュバス

朝、清々しいほどの晴天、でも僕の心は重い、肩には旅行鞆、中は衣服等の生活用品。

旅行ではありません、今日から寮生活です、

しかも女の子と……………

先が重いやられます、

そんな事を思っ歩いてしていると

「あゝ渚君」

朗らかで可愛らしい声、その聞きなれた声の方へ振り返ると一人の少女がいた、

肩くらいの長さの薄い茶色の髪、柔らかな表情、

美しいというより可愛らしいと言う表現がぴったりの女の子、空ちやんだ、

彼女は両手で大きな旅行バックを持っている、

そして学生鞆、彼女はバックは僕のより同じまたはそれは以上、女の子だ、色々と居るものもあるのだろう。

そう思っ立っっていると彼女は僕のところまで来ていた。

急いできたのか息が切れている、あたりまえだろう、彼女のような細身な体である旅行バックを運んでいるのが不思議なくらいだ。

この調子だと一緒に歩くことになりそうだが彼女の今のペースでは遅刻ギリギリになりそうだそんな事を思っっていると、

「あの、よかつたらバック持とうか？」

あー言っってしまった、馬鹿か僕は。

そんな事を思っっていると彼女は何故が顔を赤らめ

「えっ！？いや、そんないいですよ、思っですし……………」

「でもこのままペースだと遅刻ギリギリだし……………」

イマイチ分からなかった、何をそんなに遠慮するのだ？

このくらいの行為どうっ事ないと思っ。

でも僕がそう言うとな彼女は頬を上気させたまま、

「はい、でわ…お願いします」

「うん、」

そういつて僕は彼女のバックも持った、

確かに僕のよりも重いがたいした苦ではない、

小さい頃から姉にしごかれてたのは伊達ではない。

そして歩いていく、しかし未だ思う、何故彼女はあるそこまで恥ずかしがって頬を赤らめたのか、

「全く鈍い奴である」

「？」

どっからか声が聞こえたけどまあいいか。

そんなこんなで歩いてる間はほとんど口を交わさなかったが、寮の前に付いたとき、彼女が靴を開いた。

「あつあの、ここからは自分で持ちますので」

「あつそう？じゃあはい」

そういつてバックを渡す彼女は少しよろけるが体制を立て直す。

そのまま自室となる部屋に向かう、僕達の部屋は

405号室、どうやら二人一部屋なそうです。

扉を開けると中はなかなか広く快適そうだ。

洋服ダンスが二つ、キッチンに予備用のフロ（どうやら大浴場があるようだ）そしてベットが一つ、

……… ってちよつとまでええええええ！！

なんだベットが一つなんだよ！！確かにダブルベットだけど！！ちよつとまで！！俺は男だ！！そんなの無理にきまっているだろう！

「わゝ、広いね渚くん」

そうやって気楽に言う彼女、あー参ってしまいます、

しかし彼女はベットなど気にも留めません、

ベットの事をいつても「それで？」の一言です、

ああああ！！もう駄目です！！

そしてそのまま半脱力状態で学校に向かいます、

案の定、学校では昨日の続き質問攻め、やはり気分が悪くなりましたが耐えました、僕ってやれば出来る子なのですね。

そしてくたくたになって夜、お風呂（備え付け）に入り

夕食の時間、この場合は自炊か食堂があるのですが

彼女はどうかやら自炊をするようです、

しかも今夜は任してくれとのことですのでお言葉に甘えます、しかし自炊がはじまって数分、此方に届いたのは、

悲鳴& amp・煙& amp・焦げた物体

失敗のようです、彼女は半泣きになりながら、

「あうう、ごめんなさいいい」

しかたありません、このままでは晩ご飯にありつけそうに無いので、

「じゃあ僕がやるよ」

「えっ！？渚君がですか！？」

そういつて驚く彼女、僕は彼女に待つててといって

キッチンに向かう、そして、数分後できたのは

普通の料理、彼女は驚きの色を隠せてません。

そして一口、途端に

「美味しい」

彼女は感心しながらぱくぱく食べていく。

急がなければ僕の分までなくなってしまう。

そして食後、しばしの雑談後（彼女が身を乗り出したりしてすこし肝が冷えました）もう時間は１１時、そろそろ寝なくては。

僕は毛布に包まり、ソファに寝ころがります、すると彼女は

「あれえ？渚君ベットで寝ないの？」

すでにパジャマに着替えた彼女が問いかけてきます。

はい、そうです、寝ません、てか寝れません。

貴方は運がいいですよ、僕が普通の男だったらすでにあなたは大変なことになってますよ？

そんな事を重いながら丁重に断った僕は電気を消して眠ります。

夜中、さすがにソファねにくだす、外は涼しそうなので少しずむことにしましょう、

中庭、涼しい風が吹きます。

そして僕は歩いていきます、そして木の陰に倒れ掛かっている人がいます、

つてええ！？

ちよっ！！こんな時間帯に何故、近寄ってみると倒れ掛かっているのは女の子、身長は小柄な空ちゃんよりも小さい、とりあえずこんな所に寝ていたら風邪を引いてしまうので起こします、少し肩を叩くと彼女は目を開け

ドサッ

つえ？なんか僕押し倒されてません？

普通は逆だとおもうのですが、って言うか何ですかこの状態は！？

ええ作者！！

そんな自問はさておき、

僕は女の子の顔を見ます、瞬間、

ドクンッつと一気に鼓動が高鳴ります、顔が一気に赤くなるのが自分でも分かります。

どうしたものでしょう、頭の中では女性恐怖症の恐怖が渦巻いてます、しかし胸の高鳴りも顔の上気も止まりません。

彼女の顔をもう一度みると、

小さくすっきりした顔、綺麗に伸びた睫毛、整えなくとも綺麗な眉、ほんのりピンクな潤んだ唇、

空ちゃんの可愛いというのは別に妖艶ともいえる、美しい、の一言に尽きる容貌、

しかし何かがおかしい、確かに美しい、しかし僕は女性恐怖症、しかも重度堅物なのです、この手に関しては特にです。しかし彼女の前ではそんな理性がいとも簡単崩されてしまいます、しかし僕はそんな簡単には朽ちません、さっきから拳を握り爪をつきたてて耐えています、

しかし彼女はなにかフェロモンとも妖気とも言える

これはまるで昔話なんかにてくる、

淫魔、否サキュバスである、

完全無欠の美貌、そして男を魅了して止まない謎の力、まさに彼女はそんな者だった。

しかし僕は理性を振り絞って

「あつあの、どいてください」

そういわれると彼女は驚いた顔をして、少し間をおきどいた。

そして僕は彼女に

「あの、こんな所で寝てると風邪ひくから、寮に帰った方がいいよ」
そういつて僕はそそくさと自室に戻った。

去っていく少年の後姿を見つめ、少女は怪しげな笑みを浮かべる。

「ふふつ、この私から逃れるなんて」

そして彼女の目はまるで獲物を見つけたような目をして

「ふふ、面白いわね……………」

そして彼女も又闇夜に消えていった。

第三話〱サキュバス〱（後書き）

どうでしょう？第三話〱サキュバス〱、楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです。

あと一人か二人ヒロイン追加予定ですw
でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6578a/>

やっちまった!!

2010年12月19日00時13分発行